

## 紙人形劇「日天さん月天さん」の研究

紙人形劇「日天さん月天さん」の登場人物の関係性をもとにした台本研究について

宇田川 光雄

The Study of the Paper Puppet Theater (NITTENSAN & GATTENSAN)  
Rewrite the NITTENSAN & GATTENSAN Scenario by Character-Relationship

Mitsuo UDAGAWA

キーワード：人間関係（比喻）・鬼の存在・お婆さんの態度・意識調査

### 研究動機

平成 19 年 12 月 14 日に世田谷区立松沢小学校の新ポップ（学童保育）「ドキドキタイム」で、紙人形劇「日天さん月天さん」を演じた時、「鬼がかわいそう」という小学校低学年のつぶやきを耳にした。とっさに「心 入れ替たらだしてあげる」と演じた。

そして、平成 28 年 9 月 28 日、目白大学で演じた時、受講生から鬼についてのレポートが提出された。「今回、演じてくださった紙芝居はわかりやすく勧善懲悪でしたが、今日のお話しでは鬼は動物たちに何も手を出しておらず、「悪」出来事を起こしたのではないのに、お婆さんに退治された。正直、理不尽だと思いました。「鬼として生きているだけで悪として扱われるので、私は鬼の目から見たこの話を作りたいです。」

筆者は、学生のレポートのように、観客は動物連鎖・弱肉強食・種の保存・鬼は人間の心の中の邪悪な部分などと考えが広がると思っていた。

そして、平成 28 年 10 月 22 日新宿区立東戸

山小学校で演じた時、2 年生の児童から劇を観て教室に戻る時に、筆者に質問をした。「鬼は助けてもらえるよね……」。「鬼はきつと心改めて助けてもらえるよね」と彼女の言葉を繰り返した。

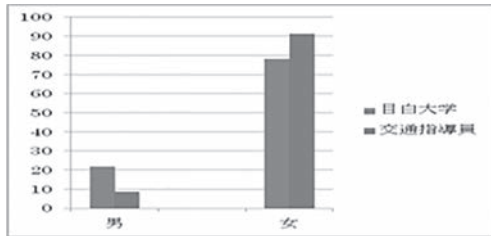
機会があり、平成 28 年 11 月 8・9 日に目白大学教育学科・子ども学科約 120 名と交通指導員約 100 名に、このことについてアンケートをした。大学 1 年生と 41 歳以上の指導員に区分して結果をまとめることにした。さらにいろいろな考えが生じる台本と登場人物について原話「オニノツリハシ」から考察し、現代社会あった台本を作成したいと考えた。

### I. 調査結果と考察

#### 1. 調査対象について

調査の対象は、教員養成・保育士養成機関で学ぶ大学生と交通安全母の会を対象としたため、女性への偏りが生じている。全体の 2 割弱が男性である。男女差大きいことからクロス集計しないで対応することとした。

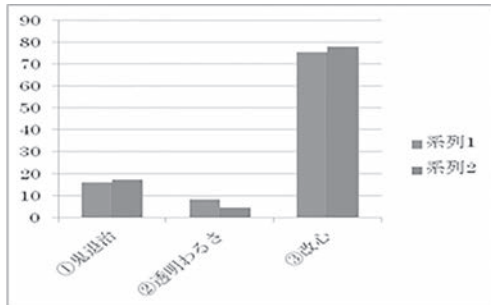
男女割合 (図1)



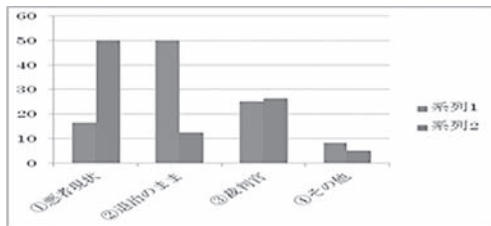
## 2. 鬼に対しての対応

鬼の反応については、年齢的比較では差異はないが (図2)、その内容については、図3のとおり、鬼に対する見方が異なっている。41歳以上は鬼を悪者として退治したことを選んでいる。(図3)

鬼の反応 (図2)



鬼に対する見方 (図3)



## 3. 鬼の対応行動

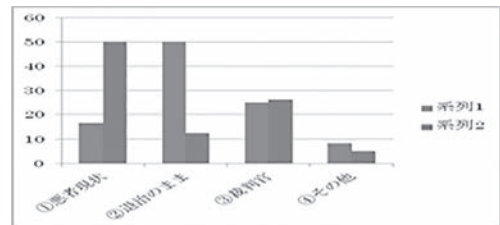
鬼は、姿が見えなくなってどうするのか。さらに心を入れ替えて元の姿になるのかについて尋ねた。

姿が見えなくなったので悪いことをさらに

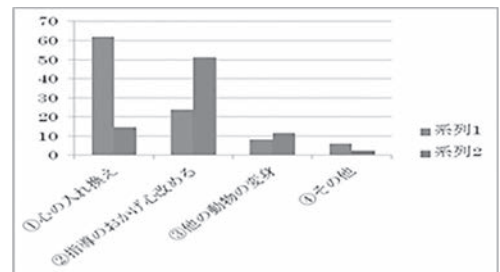
すると考えるのか、自分が見えないので悪さをしてもと考える差が顕著である。(図4)

心を改める理由については、お婆さんの指導という点に差が生じた。お婆さんの行きとどいた指導が鬼を改心させると考える41歳以上の親の判断が読み取れる (図5)。

鬼の対応行動について (図4)



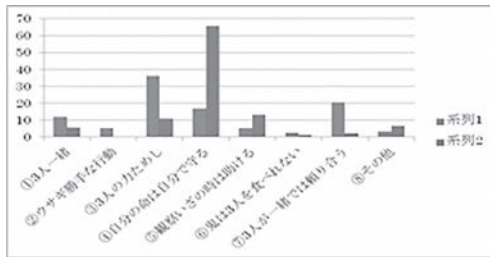
鬼の改心について (図5)



## 4. 3人で行きなさいと言わなかったお婆さんの本心について

3人の力を試したかったと自分の力でのりこえることに差が40%生じている。交通安全母の会参加者は、交通安全指導の根幹から回答していると推察される。自分の命は自分で守る視座を母の会のモットーとしていることを如実に表している。学生諸氏の回答は。力試しと3人一緒に行くとお婆さんは思っていたので言わなかったに回答が集中している。

3人で行きなさいと言わなかった理由（図6）

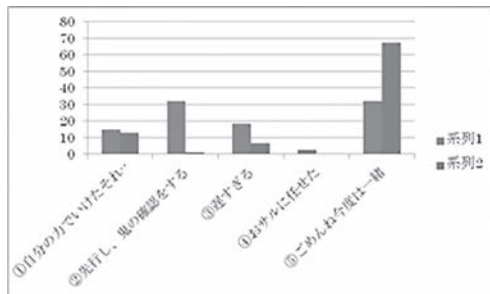


#### 5. ウサギとタヌキの次の日の会話

タヌキが次の日ウサギに言った「どうして先に行ってしまったの」にどうウサギが応えたのかについて聞いた。この質問にも「タヌキ君は遅すぎるから」（12%）、「先に行ったら鬼がいる確認したい」（30%）、「ごめんこれからは一緒に行く」（35%）に差がある。

交通安全母の会と学生との大差 35%は、「謝ることに関して」生じた。自分の意思で先行したウサギは謝ることは必要ないと考えている学生の姿が浮かび上がる。年齢により異なっている姿が浮かび上がる。

タヌキとウサギの会話（図7）



調査対象		大学	指導員
男		22	8.7
女		78	91
1	①鬼はお婆さんに退治されたまま	16	18
	②鬼は姿が見えなくなったので、あちらこちらで悪さをするようになった。	8.4	4.5
	③鬼は心改めてお婆さんに助けてもらった	76	78
	④鬼は悪ものだから、そのままでよい	17	50
1	②ウサギ・サル・タヌキをこれから食べようとするから退治したままでよい	50	13
	③お婆さんは森の裁判官だからお婆さんに考えによる	25	26
2	④その他	8.3	5.2

1	①鬼は姿が見えなくなったので、これ幸いと悪いことをさらにすると思う	13	0
	②鬼は姿が見えなくなったので、あちらこちらで思う存分にわがまま勝手に行き動すると思う	75	0
	③鬼は姿が見えなくなって悪いことをしていたが、自分の存在がないのでどこかへ行ってしまおう。	13	75
	④その他	0	25
1	①子ども向けのお話であるので、心を入れ替える展開がよい	62	15
	②お婆さんは、鬼のことをきちんと指導して心改めさせた	24	51
	③鬼は、お婆さんのもとに行き、他の動物に替えてもらった	8.3	12
	④その他	6	2.3

2	①3人はいつも仲良しだから、3人一緒に行くと思っていたから	12	5.4
	②ウサギさんが勝手に先に行ってしまったので、止めることができなかったから	5	0
	③3人の力を試してみたかったから	36	11
	④自分の命は自分で守ることを教えたかったから	17	66
	⑤鬼は3人を食べることができないと予測していたから	5	13
	⑥3人で行くと相互に頼ってしまうと思	2.5	1.1

ったから		
⑦3人で行く相互に頼ってしまうと思 ったから	20	2.2
⑧その他	3	6.5

3	①タヌキ君 自分の力で峠の上までい けたでしょう それでいいじゃん	15	13
	②先に行って、峠に鬼がいるか見たか ったからだよ	32	1.1
	③タヌキ君が遅すぎるからだよ	19	6.5
	④おサル君に君のことを任せただよ	2.5	0
	⑤ごめんね これからは一緒に行くか らね	32	67

## Ⅱ. 日天さん月天さん台本考察

調査結果に影響を与える台本内容と登場人物について考察する。

### 1. 原話「オニノツリハシ」(紙芝居)

永柴孝堂氏著述の「ペープサート脚本集」にある原話【オニノツリハシ】の紙芝居は東京都と大阪府にある国立児童図書館にて現存する。大阪にある児童図書館で紙芝居を直接触れることができたが、東京では、映像ファイル化されて閲覧するシステムになっている。



①昔あるところに丸い高いお山と丸い低いお山の二つが仲良く並んでいました。ところがこの二つの中にいつの間にか吊り橋がかかりました。

②吊り橋が出来るとこっちのお山からあっちのお山へ、あっちのお山からこっちのお山へ行ったり来たりするのに大変都合がよくなりました。

「つりはしつりはしゆらゆらゆらゆら 面白いね」

「つりはしつりはしゆらゆらゆらゆら うれしいね」

「つりはしつりはしゆらゆらゆらゆら ゆれるねでも便利だね」お山のくまさん お猿さんリスさんたちは それは それは喜びました。一体この都合のよい便利なつり橋を誰がかけたのでしょうか。

③それは遠い国から海を渡って飛んできた鬼が掛けたのです。お山の熊さんたちは便利な橋をかけてくれた鬼は親切だと思いました。鬼はお利口さんだと思いました。鬼は偉いと思いました。けれどもそれは騙されていたのです。鬼は吊り橋をかけて皆を喜ばしておいて、そのうちに橋を渡るものをそうっと捕まえて食べてやろうと思っていたのです。誰も知らない間にもう食べられた者があるかもしれません。

④丸い低い方のお山に三匹のきょうだいの鹿が住んでいました。弟「ね お兄ちゃん僕吊り橋が渡りたいの」

妹「わたしも、そして高いお山へ行って青い草が食べたいの」と弟や妹の鹿が言いました。

兄「だめだめ。鬼に捕まると大変だから」

賢いお兄さんは鬼のわるだくみをちゃんと知っていましたからとめました。けれど、お兄さんの鹿も大層お腹がすいていました。低い方のお山には、もう食べる青い草がなくなっていたのです。

小鹿たちは2日も3日も前から何も食べていませんでした。けれど、お兄さんの鹿も大層お腹がすいて

いました。低い方のお山には、もう食べる青い草がなくなっていたのです。小鹿たちは2日も3日も前から何も食べていませんでした。

⑤お兄さん鹿はしばらく考えていましたが

「日天さん月天さん 日天さん月天さん 日天さん月天さん」と3たび唱えると姿が =ぬく= すうっと消えてしまいました。

弟「あつお兄ちゃん」

妹「お兄さんどこにいるの」

兄「ここにいるよ」

弟「えっ どこ 見えないよ」

⑥兄「神様をお願いをしたのだよ。私たちが吊り橋を渡るまで鬼に見つからないようにお願いをしたのだよ」

⑦鬼「うむふもとから鹿が来るな」「今日はあいつを食うことにしよう」と鬼はまちうけています。

⑧兄「日天さん 月天さん 日天さん 月天さん 日天さん 月天さん」お兄さんは一生懸命に神様をお願いをして橋を渡りました。

鬼「おや小鹿はどこへ行ったのだろう」

鬼は、小鹿の姿が急に見えなくなったので、大きなお皿のような目をしてぎょろぎょろ見まわしました。けれどもどうしてもみえません。

コッリ、コッリ、コッリコッリと足音が聞こえるだけです。その足音もだんだん小さくなって、しまいには聞こえなくなってしまいました。一ゆるゆるぬきながら— その次は妹の鹿が橋を渡りました。

⑨妹「月天さん 日天さん 月天さん 日天さん 月天さん 日天さん」妹の鹿は、さかさまになって、ひっこりひっこりひっこりと鬼はびっくりして見過ごしてしまいました。

⑩弟「日天さん 日天さん 日天さん 日天さん 日天さん」弟の鹿は、お願いの言葉を半分忘れて、

日天さん日天さんばかり唱えましたので、姿が半分だけしか消えません。 —3分の1を抜く—

鬼「おやおや おやおや 半分の鹿があるいてく」

鬼はいよいよびっくりしました。

鬼は気味が悪くなりました「半分の鹿が歩いて行く」と鬼は怖くなりました。でもね。お腹がすいていたのでたまりません。もう辛抱ができなくなりました。

鬼「ええい、半分でもいい」—さっと抜く—

⑪きつと手を伸ばしで、つかみかかりました。けど手がしびれてどうにもなりません。

鬼の大きな体もぶるぶるがたがた震えだしました。

今にも赤鬼が青鬼になりそうです。

鬼「これはいけない こわい こわい やっぱり日本は神の国だ 神様がおつくりになった国だ おれたちではかなわない」と鬼はガタガタ震えながら雲にのるとどこともなく一日さんに逃げていきました。

⑫鹿「おいしい」

高いお山についた3匹の鹿たちは青い草をお腹いっぱい食べました。お日様は暖かい光を そっと お山一面に投げかけています。それからお山はすっかりもとの草の山になりました。

熊さんもサルさんもリスさんもみんな何の心配もなく暮らせるようになりました。 おしまひ

## 2. 考察

永柴孝堂氏は、この話を元にして、メイサケ「日天月天」を創作したと自書に明記している。原話と永柴孝堂氏創作の差を見ることによって時代背景と教材としての文化を感じ取ることができる。高橋五山氏の作成した紙芝居は、戦時中の姿を見ることができる。永柴孝堂氏が指摘したように「これは当時の日本と南方

資源地と敵米英を表したものであった。日本は神国で、神に使えるケモノは鹿であるというので、3兄弟の鹿が・・・」と思いを語っている。

この呪文を用いて姿を消す面白さをペープサートに導入したのである。導入したのは、もちろん戦後である。(ペープサートが保育教材として紹介されたのは昭和22年ごろであると著作にある)。導入に際しては、面白く展開していくことを中心にして再構成する必要があった。

#### 1. 原話「オニノツリハシ」と

ペープサート「日天さん月天さん」の比較

##### 1) 台本の差

原話【オニノツリハシ】

2つの山があり、低い山に動物たちが住んでいる。低い山には草がなくなり、高い山へ動物たちは移動したくなる。外国からやってきた鬼が掛けた。鬼は、このつりはしを通るものを食べようと狙っている。動物たちは大喜びで、橋をかけた人は偉い人だと喜んでいった。3匹のきょうだい子鹿も高いお山へ行きたくなる。兄鹿は、鬼が橋を掛け、食べようとしていることを知っていた。そこで、兄鹿は神から授かった「日天さん月天さん」のおまじないを言い、神にお願いをする。すると兄鹿の姿は見えなくなる。こうしてツリハシを渡ることを鹿の妹・弟は知る。兄鹿は消えてツリハシを渡し、妹は、おまじないを逆さに言うてしまう。逆さまになった鹿を見て、鬼がびっくりしているうちに、渡ることができた。次に弟がやってきておまじないを「日天

さん」と言うてしまい、胴から、後ろ脚が消えて、半分になってしまう。鬼は半分でも食べようと手を伸ばすのだが、後ろがないので捕まらない。どうにか弟もツリハシを渡る。鬼は、体の色が赤から青になり、ここは神の国だ。とてもかなわないと退散する。

きょうだいの鹿はおいしそうに草を食べ、太陽は明るく輝く。

ペープサート「日天さん月天さん」台本では。

今日は、ニコニコ山のお祭り。ウサギ・サル・タヌキが峠を通して、お山に行く。ところが、峠の上に鬼がいることをカラスさんが教えてくれる。困った3人は、魔法使いのおばあさんに知恵をもらう。魔法使いのおばあさんは、大きな声で、「日天さん月天さん」と言うて姿が消える呪文を教えてくれる。もとに戻る呪文は「おとぎ峠に星が出た」と教えてくれる。これで安心と3人は峠に向かう。

ウサギが峠に差し掛かると、鬼が食べようと飛び出してくる。ウサギはおばあさんに教えてもらったことを小さな声で震えながら「日天さん月天さん」と言う。ウサギは影になって鬼の前を逃げていくことができた。

次にタヌキが来る。タヌキは「月天さん日天さん」と逆さまに言う。すると逆立ちして、鬼の前を逃げていく。鬼はびっくりしてみている間に逃がしてしまう。

次にサルがやってくる。鬼が食べようとすると「日天さん日天さん」と日天さんだけ言う。サルは、上半身が消えて、お腹と足だけで、鬼の前を逃げていくことができた。

そこへ心配になった魔法使いのおばあさんがやってくる。鬼はばあさんが何か教えたこ



とを勘繰り、問い詰める。日天さん月天さんと教えたことをおばあさんは暴露すると、鬼は俺もやってみようと「日天さん月天さん」と大きな声で言う。見事に姿を消した鬼は、おばあさんに「どうしたらもとに戻れるのか」と尋ねる。おばあさんは出してくれません。(永柴孝堂氏は演出として姿を変えたり、元に戻るなど工夫している)

3人のところにやってきたおばあさんは呪文の間違いを論しながら、「おとぎ峠に星が出た」を言わせて、もとの姿に戻す。そして、お祭りに行くことができた。

下線を引いたところが、大きく話が異なっているところである。差異を表にまとめると次ようになる。

①目的の差異「難所を超える意味」

	高橋五山作 鬼ノツリハシ	永柴孝堂作 日天さん月天さん
目的の 違い	南方の地を獲得することを目的に、敵米英との戦いに勝利する神国をイメージする	お山のお祭り・花火大会などイベントに参加するために峠を越えて目的地に行く

②登場人物の差異

台本を途中で何度も考察している。登場人物の変化と鬼の演出である。登場人物は当初「ウサギ・サル・たぬき・魔法使いのお婆さん・鬼」であるが、「ウサギ・タヌキ・ブタ・魔法使いのふくろう・オオカミ」に変えている。試行錯誤の末、人間とケモノ達の方がバラエティに富んでいてよいと著述している。鹿とケモノ達の異なりは、神の使いという設定と幼児たちへの教材としての差であると考える。

	高橋五山作 鬼ノツリハシ	永柴孝堂作 日天さん月天さん
通過者1	兄 鹿	ウサギ
通過者2	妹 鹿	タヌキ
通過者3	弟 鹿	サル*【ブタ】
敵	赤鬼	赤鬼(オオカミ)
超人	(神)	魔法使いお婆さん *【フクロウ】
その他	熊・猿・リス	カラス

③呪文の差異

	高橋五山作 鬼ノツリハシ	永柴孝堂作 日天さん月天さん
呪文と 姿	兄鹿は完全に消える 妹鹿は逆さまになる 弟鹿は半分になる (頭と前足・胸は見えている)	ウサギは影になる タヌキは逆立ちする サルは上半身が消える(お腹とあしが見えている)

呪文の違いについては、高橋五山氏は兄鹿が自らの力で神の力を受けて「日天さん月天さん」を示す。永柴孝堂氏は、神の力ではなく、魔法使いのお婆さんから授かることにしている点が基本的に異なっている。

さらに、呪文を念じ続けると姿の変化が持続する点と呪文を言うことにより変化する差がある。永柴孝堂氏は、さらに、呪文を加えて『日天・月天だから星が必要』ということで新しい呪文を創作した。

さらに、呪文による変化に差がある。「日天さん日天さん」という弟鹿とサルの消えている部位が異なる。

弟鹿は胴より後ろ脚が消える。サルは上半身が消えて下半身だけで行動する姿となる。イラストにもよるが、ペープサートの人形は直立しているの、下半身が消えても見る者

には印象が少なく、上半身が見えている

姿は、異質なものになっていない。

そんな姿になってしまったのかと

いう視覚的变化が感じられない。



また、高橋五山氏のオニノツリ

ハシのストーリーとの関係からも読みとれる。

鬼が後方から掴もうとしても掴めないのとい

う設定があるからに他ならない。

#### ④難所を越える順番の差異

	高橋五山作 鬼ノツリハシ	永柴孝堂作 日天さん月天さん
難所を越 える順番	兄鹿・妹鹿・弟鹿 という年齢の高い 順。	ウサギ・タヌキ・ サルという順

高橋五山氏の「オニノツリハシ」は兄が見本を見せるという姿で、構成されているので、兄・妹・弟となる。永柴孝堂氏の「日天さん月天さん」は消える形との関係や動物たちの動きから考えている。すばしっこいウサギが初めに震えながらもきちんと呪文を唱えて、影になる。(あるいは完全に消える演出の取り上げている)そして、次がタヌキである。「月天さん日天さん」と逆さまに言ってしまい逆立ちになる。最後に、サルが来て、上半身半分になる。という順序である。

#### ⑤新しい呪文の創作

高橋五山氏の「オニノツリハシ」と永柴孝堂氏の「日天さん月天さん」の差異で、肝心なのが新しい呪文である。その誕生の背景は、神の使いからケモノに変わったことによる登場人物の変化である。このことにより、教えてもらうという状況が生じたのである。

誰が教えてくれるのかと永柴孝堂氏は考慮した。魔法使いのお婆さんの登場となった。

この超人的な魔法使いがウサギ・サル・タヌキに智恵を与える構成である。

さらに、高橋五山氏は、念じている間、姿が変わるという展開であるが、永柴孝堂氏は、元に戻る呪文を創作した。それが「お伽峠に星が出た」である。永柴孝堂氏は、「日天と月天だから『星』だ」と顧述している。

この呪文の付加により物語に深みを増したことは事実である。後半のどうしてその姿になったのかを振り返る魔法使いのお婆さんと3人とのやり取りで、観客の子どもたちが自分で感じたことを確認することができる。さらに、このことにより人形の動きが活発になる展開となる。

また、台本に工夫していろいろな演出を試みている。ウサギの完全な呪文による消えて元に戻る展開と呪文は間違いなく言うが、ふるえながら小声で唱えるため「影」になる展開がある。今では「影」になる展開が主になっている。

太陽・月・星について地名が残っているので、参考に記載する。茨城県石岡市には、国分寺を守るために3つの神社が取り囲んで位置している。日天宮・月天宮・星の宮である。国分寺を囲むようにお宮を配したのである。読み方は「ニッテンゲー・ガッテンゲー・ホシノミヤ」である。「お天道様・お月様・お星様」でもある。このことは、日本人の生活に位置づいていることを示している。子どもたちにもなじみ深いものであることから、見事な呪文の完成と称賛することができる。

#### ⑥鬼の退散の差異

高橋五山氏は、鬼は神の使いの鹿を捕まえ



られないと吊橋の下から逃げていくが、永柴孝堂氏は、鬼を呪文で姿を見えなくする展開をした。ここに大きな違いがあるが、その違いは国策紙芝居の姿である。

ここで重要なのは、鬼の姿が見えなくなることによる更なる悪事を展開することに対する疑問である。

結論から言うと自分の存在が見えないのに悪いことをしても自己存在がないということである。透明人間が何をしてもし受け入れられない状況である。

永柴孝堂氏は、この鬼の退散についてもいろいろ試みている。「元に戻る」と「戻ることができない」の2通りであるが、元に戻るときに鬼以外のものになるアイデア。鬼の「角」がなくなる・「カエル」になるなどの変身による演出を考えたのである。

#### 参考1（鬼が元に戻る展開）

永柴孝堂脚本「日天さん月天さん」台本  
白眉学芸社「ペープ人形画帳」

ウサギ、タヌキ、サル、魔法使いのおばあさん、赤鬼、(カラス)

#### 第1景

下手から楽しそうにウサギがやってくる

ウ「今日もいいお天気でうれしいな。向こうからタヌキ君が来る。呼びましょう」

タ「やア、ウサギさん今日は」

ウ「今日は、タヌキ君これからお山へあそびにいかないか」

タ「行こう行こう。どこの山へ行くの」

ウ「ニコニコ山へ行かないか」(山の名は何でもよい)「あそこへ行くと富士山が見える

よ」

(これも適当でよい)

タ「それじゃ、早く行こう」

(向こうから誰か来るのを発見)

タ「あれ、サル君がやってくるぞ」

ウ「本当だ」

タ「3人で行こう」

ウ「それがいい」

2「おーい、サルくん 早くおいでよ」

(サル下手から登場)

サ「今日は 君たちこれからどこへ行くの」

タ「山へ行くの」

サ「行きたいな、どこの山」

ウ「ニコニコ山へ行くんだ」

サ「えっ ニコニコ山だって、あそこへ行つてはダメだよ」

2「どうして」

サ「昨日、カラスさんが教えてくれたんだけど、あの山路に鬼が出るんだってさ」

タ「え 鬼だって、困っちゃったな」

ウ「あ いいこと思い出した。この森に、魔法使いのおばあさんがいるだろう。あのおばあさんは、親切で子どもが好きで、そして何でも知っているよ。みんなで、あのおばあさんをお願いしてみようか」

タ「そうだ そうだ それがいいや」

サ「それじゃみんなで、呼んでみよう」

(3人は森へ向かって大きな声で呼ぶ。おばあさん登場)

3「おばあさん、こんにちは」

お「はい はい こんにちは いつもお前たちは仲良しで結構じゃ」

ウ「おばあさん 僕たち今日ニコニコ山へ行

きたいのです」

お「何だって、ニコニコ山だって、だめだよ、

あそこには鬼が出るよ」

サ「僕が言ったとおりだ」

タ「その鬼を退治してください」

3「お願いします」

お「困ったね そうだ 元気な声で日天さん、

月天さん と言ってごらん」

ウ「日天さ月天さんてなんですか」

お「まあいいから やってごらん」

ウ「日天さん月天さん」

お「もっと元気な声で」

ウ「はい 日天さん月天さん」

(パッとウサギが消える)

2「うさぎさんがいなくなっちゃった」

お「こんどはたぬきさん」

タ「あのう 日天さーん ガッガッ」

お「忘れてはいけないね 月天さんだよ」

タ「月天さん」

お「日天さんだよ」

タ「日天さん 月天さん」(タヌキも消える)

お「おサルさん やってごらん」

サ「日天さん 月天さん」(サル消える)

3「ほくたちいなくなっちゃった」

お「鬼が出てきたら、そうして消えてしまえ

ばよいでしょう」

3「どうもありがとうございます。あ だけ

ど どうしたらでられますか」

お「それも元気な声で おとぎ峠に星が出た

と言ってごらん」

(3人は、おとぎ峠に星が出たと言ってそれぞれ現れる)

お「それでは、気をつけて行っておいで」

3「ありがとうございました」

(ウサギは、ぴょんと跳ねるように、威勢

よく下手に入る。タヌキ・サルはそれを

追うように下手にかけてはいる)

## 第2景 山路

オ「ここは俺様の山だ。ここへ来るものは、

ひどい目にあわすぞ、おや ウサギが登っ

てくるな、よしうまそうだから食べてや

ろう」

ウ「やっ と お山に来たぞ 鬼が出てこなけ

ればいいがなあ。大丈夫だ。鬼はいないや。

そうだ 今のうちに、ここを通過してしま

いましょう」

オ「こら ウサギ 食べてしまうぞ」

ウ「うわー おたすけ」

オ「食べるぞ」

ウ「そうだ おばあさんに教わったこと な

んて言ったかな ええと ええと」

オ「なにが ばあさんだ」

ウ「思い出した 日天さん月天さん」

(うさぎ 消えてしまう。鬼はびっくりし

て立ちすくむ)

ウ「おとぎ峠に星が出た」

(声だけ聞こえて、鬼の後ろから姿を現し

て、逃げていく)

ウ「おどろいた 早く行こう」

オ「これは変だぞ、ウサギが何か言うのと姿が

消えた。何だか気味が悪い。おや タヌ

キが来る。よし今度こそ逃がさないぞ」

タ「ここが山だ。鬼が出てくると怖いぞ。ウ

サギさんどうしたかな。うまく通って行っ

たかな。何だウサギさんはもう行ってし

まったらしいぞ。鬼が出なかったんだ。

鬼なんかちつとも怖くない」  
オ「なんだ タヌ公」  
タ「鬼だ お助け」  
オ「ウサギは逃したが、お前は食べてしまうぞ」  
タ「あ そうだ おばさんに 教わったの何  
    といったかな」  
オ「なにが おばあさんだ」  
タ「わかった 月天さん 日天さん 月天さ  
    ん 日天さん」(タヌキ さかさまになる。  
    鬼は、立ちすくむ。タヌキそのまま上手  
    に入る)  
オ「これは いっぱい なんということだ  
    こんどは サルが来る 今度こそパクリ  
    だぞ」  
サ「僕が一番びりになっちゃった。けれどウ  
    サギさんたぬきさんどうしたのかな 鬼  
    はいないらしいぞ、この間に行こう」  
オ「こら サルめ」  
サ「鬼だ あの おばあさんの何だっけ」  
オ「おばあさんの」  
サ「そうだ 日天さん日天さん」(上半身消え  
    て)  
オ「何が何だかわからなくなったぞ。一体こ  
    れはなんということだ」  
オ「や 今度は、ふもとの森の魔法使いのお  
    ばあさんが来るぞ。みんなして、ばあさ  
    んと言っていたが、あのばあさんがみん  
    なに何か教えたな。そうだったらひどい  
    目にあわせてやるぞ」  
お「やれやれ 年をとると山路も楽ではない  
    わい。みんなに日天さんを教えてやった  
    ものの、やはり心配で来ましたよ。さて、  
    どうしたやら」(鬼が急に飛び出してく

る)  
お「おや びっくりした。お前は鬼か」  
オ「お前は鬼かもしれないもんだ お前だろうみ  
    んなに何か教えたのは」  
お「みんながどうかしたのかい」  
オ「ウサギが来たから 食べようと思ったら」  
お「うさぎはどうした」  
オ「何か大きな声でいったかと思うとパッと  
    消えてしまったのだ」  
お「おやおやそうかい」  
オ「二番目にタヌキが来た タヌキの奴なん  
    か言うとかかさまになって行ってしまった」  
お「何だって、さかさまになって」  
オ「その次にサルが来た サルは半分消えて  
    行ってしまった」  
お「やれやれよかった よかった」  
オ「よかったとはなんだ。やっぱりおばあさ  
    んがみんなに何か教えたな」  
お「おしえたとも」  
オ「何と教えた」  
お「日天さん月天さんだよ」  
オ「なんだって 日天さん月天さん何のこと  
    だ」  
お「あれを言うと姿が消えるんだ」  
オ「消える 面白そうだな」  
お「おもしろいとも お前もやってごらん」  
オ「よし やってみよう 日天さん月天さん」  
    (鬼が消える)  
オ「面白い 面白い 消えたぞ消えたぞ」  
お「フッフ 面白いじゃろ」  
オ「それから 出るのはどうするんだ」  
お「ばかものめ」

オ「なんだと」

お「お前のような悪い奴は、消えてしまうが  
よい。はい さようなら」

オ「おばあさん 助けてください もうわる  
いことをしないよ 出してくれ」

お「きっと悪いことをしないな」

オ「わるいことはしないよう。いい鬼になる  
よう。許しておくれよう」

お「それでは、おとぎ峠に星が出たと言って  
ごらん」

オ「おとぎ峠に星が出た」（鬼 現れる）

オ「どうもありがとうございました もう悪  
いことはいたしません。ごめんなさい」  
（下手に入っていく）

お「あらあら、みんな、変な格好をして山の  
方へ行きますよ。どうしたいのだろう。  
みんな、おまちよう。おまちよう」

### 第3景 ニコニコ山

ウ「ここがニコニコ山だ。みんなどうしたか  
な。タヌキ君が来るぞ。オーイ早くおい  
でよ」

タ「こんなになっちゃった」

ウ「そうしたの それは」

（下手からサルがやってくる）

サ「わーい 僕 こんなになっちゃった」

ウ「ええっ サル君 どうしたの」

（下手からおばあさんも来る）

お「なんだい たぬきさん きっと月天さん  
日天さんと反対に言ったのでしょう。お  
や おや おサルさんは、日天さん日天  
さんばかり言ったのでしょう。さあ、2  
人とも元気な声でおとぎ峠に星が出たと  
言ってごらん」

2「おとぎ峠に星が出た」（2人もとに戻る）

お「よかった よかった それではみんなし  
て お山に遊びに行こう」（ウサギ おば  
さん タヌキ・サル順に歌を歌って上  
手に入っていく）

### Ⅲ. 新しい台本をつくるために

新時代の台本を作成するために次の6項目  
を検討する。

- ①目的の現代化 ②登場人物の決定 ③登場
- ④鬼の情報 ⑤峠への登場と変身 ⑥鬼の退散

#### 1) あらすじ（台本）の異なり

紙芝居「オニノツリハシ」をもとに、前述  
のとおり高橋五山氏の許可を得て、永柴孝堂  
氏が、ペープサートにしたことが、ペープサート  
脚本集に記されている。そこには次のよう  
に記載されている。「原話は、戦時中全甲社で  
発行した紙芝居の【鬼の吊り橋】である。こ  
ちらの山のケモノ達が。アチラの山へ食物を  
とりにいく。山と山の間には、一本の吊り橋が、  
かかっている。それを渡っていくと、オニが  
現われて邪魔をする。これは当時日本と南方  
資源地と敵米英を表したものである。日本は  
神国で、神に司えるケモノは鹿であるという  
ので、三兄弟の鹿が、神様に【日天さん月天  
さん】という呪文を教わって、勇みよく出か  
けていくが、肝心の呪文を間違えて、逆さま  
になったり、半身になったりするのです。かえ  
ってオニが驚いて逃げてしますという痛快なハ  
ナシであった。」

許可を得て、ペープサートにしたので、呪  
文を間違える面白さを前面に打ち出した作品  
とした。鬼が消える場面も逃げていくのでは

なく、魔法使いのおばあさんの力によるものと変化させた。この脚色により子どもたちの勇気ある行動。課題を解決していく子どもたち（ウサギ・サル・タヌキ）の主体的な取り組み内容となった。この台本の末尾に、永柴孝堂氏は「古いといわれても、日天さんはメイサクである。結局は、これを扱うもののセンスによって、いくらでも、新鮮な味わいが出てくることを信じている。幸い、これを使われる諸兄姉の力によって、きっと素晴らしい「日天月天」が生まれることだろうと、メイ作日天さんのために、ペープサートのために、私は大きなネガイをかけているのである」と記されておられる。

筆者は、永柴孝堂氏の遺志をついで、「仲間を大切にする」「挨拶の大切さ」「自分たちで解決する主体性の発揮」「目的を失わない姿」を台本の支えとした。

永柴孝堂氏との違いは、鬼の前を通過する課題を越えるための目的にある。仲間を大切にするお見舞いの設定である。

## 2) 登場人物の異なり

主題の異なりは、登場人物の違いを意味することになる。オニノツリハシは神の司であるから「鹿」でなければ意味がない。柴孝堂氏は、子どもたちが喜ぶキャラクターに変化させている。ウサギ・サル（ブタ）・タヌキ・鬼（オオカミ）・魔法使いおばあさん（フクロウのおばあさん）にして脚本とした。これにより変化が子どもたちの楽しさを増すことにつながった。永柴孝堂氏は、いろいろな変化を試みたが、最後は、ウサギ・サル・タヌキ・オオカミ・魔法使いのおばあさんとした。

筆者も永柴孝堂氏が、この組み合わせがバラエティあってよいと著述している通りと考えた。動物は子どもたちの同一化を促すものであり、そこに超人的な魔法使いという存在と鬼という架空の存在が物語に厚みを増していると考えた。

## 3) もとの姿に戻る異なり

もとの姿に戻る呪文は永柴孝堂氏のオリジナルであることが分かった。神という存在を物語から消すために、新しい呪文が必要となり、永柴孝堂氏が見事な呪文を創作したのである。

## 4) 鬼退治の異なり

鬼の退治に関しては、主題から捉えれば、明白なことである。退散する高橋五山氏の原作は、神の国にはかなわないから退散する。永柴孝堂氏の脚色は、子どもたちは頑張って逃げることはできたが、鬼を退治するまでには至らない。自分たちのできることをやる設定である。そして、呪文を間違えて通過したことを再度確認する場面を設けることで、呪文の間違いにより変な形になったことを理解してもらう設定としている。変化した理由が面白いのであり、鬼退治に意味を見出しているわけではない。原作に忠実ならば「鬼はどうしたことだ、この山の動物たちはおかしな呪文を使う。とてもかなわない違う場所に行こう」とすることもできる。

あくまで、呪文の間違いを面白く伝える中で、子どもたちの勇気を表現したかったのであろう。

## 5) 難所を越える意味

オニノツリハシは、こちらに食べるものが

なくなったことによる移動。これは南方資源を求める日本の姿であるが、永柴孝堂氏は、「お祭り・遊びに行こう」という設定である。

筆者は、話に厚みをもたらすため「くまさんのお見舞いに行く」ことにした。峠を越えていかなければならない理由の明確化である。ここに新たなテーマが生まれたと考えている。仲間を思う気持ちがあるから、難局を乗り越えるという設定である。ここに大切な行動目標があると考えた。

#### 6) 難所を越える順番

高橋五山氏は長兄の行為を見本として、真似ていきなさいという教えを示している。永柴孝堂氏は、登場人物の性格に合わせた展開とした。ウサギ・タヌキ・サルとなっている。筆者は足の速いウサギ、次にサル、ゆっくりのイメージのタヌキという順序がよいと判断した。

この順序は呪文の間違えと連動して、重要だと考えた。ウサギは、呪文を間違わないが、震えながら小さな声で唱えることで、薄い影になる。サルは呪文を半分しか言わなかったので、半分消える。そして、上半身が消えたので、続いて登場するタヌキは下半身だけが消えてしまうのではないかという予測を観客がする。その予測に反して、逆立ちする変化を見せるという順序にした。

#### 7) 呪文の間違え

呪文の間違えは、高橋五山氏のオリジナルにすべて同じであるが、高橋五山氏と永柴孝堂氏の違いは半分に消えるところが異なる。

筆者は、永柴孝堂氏と同じで、顔が見えないことが怖いことであり、鬼が驚いているう

ちに逃げていくという設定がよいと思つてのことである。

#### 8) 初めの登場

紙芝居とペープサートとは次の点が異なる。紙芝居は、状況を設定するところから話が始める。題名があり、次に登場人物が示され、展開されていく。ペープサートは、登場人物がいきなり出てくる。この出方も永柴孝堂氏は、2通り演出している。一人ずつ順番にウサギ・タヌキ・サルと登場する展開・ウサギとタヌキが先に登場して、ブタさんが登場する。

筆者は、サルとタヌキが先に登場する。そしてウサギがついてこないことに気が付き、2人で呼ぶとウサギが新しい情報をもってやってくるという設定である。ペープサートの特徴である同時に同じ動きが出来ることの面白さをはじめに見せるという考え方から2人の登場とした。

#### 9) 演出効果

始まりは歌で始まる設定をした。森のくまさんである。熊さんの風邪のお見舞いということで、この歌を選んだ。また終りで、熊さん「おわり」というカードをもって登場する。その時に会場の子どもたちと一緒に歌うということもできる。

また、鬼がいることを教えてくれるのはクラスではなく「燕」とした。ツバメ号のスピートを大切にしたい演出である。

さらに3人組の挨拶の徹底など加えて完成させた。

#### 2. 筆者台本

「仲よしのお見舞い＝日天さん月天さん＝」



紙人形劇「日天さん月天さん」の研究

登場人物

基本人形 ウサギ サル タヌキ

魔法使いのおばあさん オニ (赤オニ)

活動人形 ウサギ サル タヌキ

景 画 大きな木と岩 峠の立札 終表示

第1景『麓の森』

上手に大きな木

ナレーター『紙人形劇 仲よしのお見舞い  
＝日天さんに月天さん＝』

「ある日森の中 熊さんにであった」「花咲く森の道 熊さんに出会った」

(ここまで歌い、サルとたぬきが下手から登場)  
「熊さんの言うことにゃ お嬢さん お逃げなさい」「スタコラサササノサスタコラサササノサ」(サルとタヌキが掛け合い歌いながら代わる代わる動き、スタコラのところで一緒に動く)

(一度上手に入り再び上手から登場)

サ「狸君、ウサギさんが来ないよ」

タ「ほんとだ。どうしたのだろう。2人で呼んでみよう」

(サルと狸一緒に動かしながら)

サタ「ウサギさーん」「ウサギさーん」(間)

ウ「昨日であった 小さなウサギ、名前はバニー」「オーイエー」(とだんだん声を大きくし、歌いながら下手から登場する)

サ「ウサギさんどうしたの」

ウ「さっき小川で水飲んだでしょ。あんまり冷たくて気持ちがよかったから、尾っぽまで洗ってたんだ」

タ「そうか、じゃあ熊さんのところ行こう」

サ「熊君のところへ行こう」

(ララララララと歌いながら2人は熊君のところへ行こうとする)

(ウサギがついてこないことを知り、2人は、止まって一緒に振り向く)

タ「ウサギさんどうしてこないの」(と聞く)

サ「ウサギさんどうしてこないの」(と聞く)

ウ「さっきさ、小川で尾っぽを洗ってた、燕さんが教えてくれたのだけど」

サ「何を教えてくれたの」(とウサギに近寄るようにする)

ウ「熊君の家に行くには峠の上を通るよね」

タ「うん 通るよ」

ウ「じゃあ、僕たちいけないや」

サ「どうしてだよ」

ウ「峠の上に 峠の上に 鬼が出るんだって」

サタ「エッツ、鬼」

(といいながら、2人は飛び上がるように人形を動かすし、舞台そでに入る)

(そして、恐る恐るウサギに近づいて)

サタ「うさぎさん、なんだっけ」

ウ「鬼だよ」

サタ「エッツ、鬼」(といいながら再度飛び上がる)(ゆっくりと戻りながら)

サ「どうしよう。熊さん風邪を引いて寝ているのだよ。燕さんにお見舞いに行くって伝えてもらったし」

タ「行かなきゃ悪いし」

ウ「どうしよう」

サ「どうしよう」

ウ「そうだ。魔法使いのおばあさんに聞いてみよう。何かよいことをお教えてくれるかもしれない」

タ「それはいい」

ウ「3人で呼んでみよう」

3人「おばあさん、おばあさん、おばあさん」

サ「あれ、おばさんどこかに行っちゃっているのかな」

ウ「僕たちだけじゃ、聞こえないのだ。みんなにも手伝ってもらおうよ」

タ「それはいい」

サ「皆さん一緒におばあさんと呼んでください」

【会場の観客を引き込む】

ウ「じゃあ、声をそろえてね。1, 2, 3」

3人「おばあさん」「おばあさん」「おばあさん」  
(間)

オ「おやおや 誰かと思ったら、お前さんたちかね。お前さんたちは仲良しで 結構じゃな。今日は何の御用かな」

ウ「僕たち熊さんの家に行くのです」

オ「そうかいそうかい。熊さんは風邪を引いて寝っていると燕さんが教えてくれました。それはよいそれはよい」

サ「だけど、僕たちいけないのです」

オ「それはどうしてじゃ」

ウ「峠の上に鬼がいるのです」

タ「行かなきゃ 熊さんがかわいそうだし、行けば僕たち食べられちゃうし。

おばあさん 何かよいことを教えてください」

オ「それは困ったことじゃ。そうだ日天さん 月天さんの呪文を教えてあげましょう」

ウ「日天さん月天さんって何ですか」

オ「大きな声で、日天さん月天さんというと 姿が消えるんじゃないよ。さあ、ウサギさんからやってごらん」

ウ「僕やってみます。日天さんに月天さん……………」

(スライド笛を吹き、消える)

サ「おばあさん、ウサギさん消えちゃったよ」

オ「サアサ、お猿さんもやってごらん」

サ「日天さんに月天さん……………」

(スライド笛を吹き、消える)

タ「おばあさん、2人とも消えちゃったよ」

オ「サアサ、狸さんもやってごらん」

タ「僕やってみます。日天さん月天さん……………」(消える)

3人「おばあさん、僕たちみんな消えちゃったよ」

オ「こうして姿を消していきなさい」

3人「でもどうやったら元に戻れるの」

オ「消えて行ったら、熊君がびっくりするね。出るのかい。出るのは簡単。おきな声でおとぎ峠に星が出たといってごらん。ウサギさんからやってごらん」

ウ「おとぎ峠に星が出た」

(スライド笛で出る。おばあさんと挨拶をする)

ウ「おばあさんこんにちは」

オ「はいこんにちは」

ウ「元に戻ってこんにちは」

オ「はいこんにちは」

ウ「もうひとつおまけにこんにちは」

オ「はいこんにちは。次にお猿さん おとぎ峠を言ってごらん」

サ「はい、言ってみます。おとぎ峠に星が出た」  
(スライド笛で出る。出てきたところで、ご挨拶)

サ「ウサギさんこんにちは」

ウ「はいこんにちは」

サ「もうひとつおまけに、こんにちは」

ウ「こっちもおまけでこんにちは」  
オ「さてさて、挨拶好きなよい子たちだこと。  
さてと、狸さんがまだ出てないじゃない  
かね。狸さん、おとぎ峠を言ってごらん」  
タ「はい、やってみます。おとぎ峠に星が  
出た」（スライド笛で出る）  
タ「皆さんこんにちは」  
2人「狸さんこんにちは」  
タ「みんな出たので、こんにちは」  
2人「よかった よかった、こんにちは」  
オ「熊さんに私からもよろしく伝えておくれ、  
じゃさようなら」  
ウ「おばあさんさようなら」  
オ「はいさようなら」  
サ「おばあさんさようなら」  
オ「はいさようなら」  
タ「おばあさんさようなら」  
オ「はいさようなら」  
ウ「おばあさん」  
オ「なんだい」  
ウ「もう出てこなくていいよ」  
（ウサギ急いで、先に行く）  
2人「待ってくれよう」  
（と追いかけていく、タヌキはゆっくりと行く）  
オ「3人を行かせたものの、心配じゃな」（と  
舞台を行ったりきたりする。後ろから  
そーっとついていく）

第2景『峠の上』

（場面を転換する。木を反転させる。峠の標  
識を立てる）  
（少し間を空けて、舞台をたたきながら、さっ  
と登場する）  
鬼「ワーッオ。わしはこのあたりに住む鬼だ。

自分で言っているので間違いはない。近  
頃はわしがここにいることを知っていて、  
誰も通らないからお腹がすいて仕方がな  
い。うまい獲物は来ないものかな。あれ、  
峠の上にやってくるものがいるぞ。

しめしめ、あの岩の陰に隠れて待つこ  
とにしよう。皆さん私があの岩の陰に隠  
れていることを言わないでくださいよ。

誰だ 教えるなんて言っている奴は。  
くるぞくるぞ パクリだぞ」  
（と言いながら、岩の陰に隠れる。そのと  
き、少しだけ手などを出しておく）子ど  
もたちの反応に手が出ている などと声  
が出るので、対応する）

ウ「ここが峠の上だぞ、鬼が出ないうちに通っ  
てしましましょう」（岩の元に差し掛かる  
とそのとき）

鬼「鬼だ」

ウ「助けてください、なんだったっけ、おば  
あさん」

鬼「何だ おばあさんがどうした」

ウ「そうだ思い出したぞ、おばあさんに教え  
てもらったこと、日天さんに月天さん」

（と震えながら小さな声で言う。スライド笛  
も弱々しく吹き、ウサギが薄くなって、鬼  
の前を通過していく、鬼は追うように後を  
つけていくが、見送ってしまう）

鬼「何じゃ あいつ、口の中で もごもご言っ  
たら、陰になって行っちゃった。おやま  
た上ってくるぞ。今度こそパクリだ。皆  
さん私が隠れていることを言わないでく  
ださいよ」「来るぞ・・・」

（と言いながら振り向いたりしながら木の陰

に隠れる)

サ「ここが峠の上だ。ウサギさんは無事に通ったのかな。誰もいないぞ、通ってしまえ」

鬼「鬼だーッ。さっきのウサギは逃がしたが、お前はパクリだ」

サ「なんだったかな、おばあさんに教えてもらったこと」

鬼「なにがおばあさんだ」

サ「そうだ。日天さんだよ。そうだそうだ。日天さんに日天さん・・・・」

(スライド笛を 吹き、反転させて半分になって鬼の前を通り上手に行く)

鬼「なななななんだ・・なんだ」(とサルを見送る)

鬼「去るものは追わず。そんなこと言っていないで、半分でも食うのだった。フン イライラする。また、上ってくるぞ。今度こそ食ってやる。岩の陰に隠れていることを言わないでくださいよ」

タ「ここが峠の上だぞ、2 人は無事に通れたのかな。僕は太っているから、一番最後になっちゃった。誰もいないようだ。そつとそつと通りましょう」

鬼「鬼だッー。ウサギとサルは逃がしたがお前は、逃がさない。食ってやる」

タ「助けてください、おばあさん おばあさん なんだったっけ」

鬼「何が ばあさんだ」

タ「そうだ。月天さんに日天さんだ。月天さんに日天さん・」

(スライド笛を吹き、反転させて、逆立ちにする)

鬼「やややや・・・・ああああ。これはどうしたということだ」(鬼の前を通過して、逃げていく)

鬼「あれれれれれ・・・・、逆立ちしやがった。見とれていて逃がしてしまった。あいつら ばあさん ばあさんといっていたが・・・・やや、ばあさんがやってくるぞ。何か教えたのはあのばあさんだな。聞き出してやろう」

オ「やれやれ年を取ると山登りは疲れますよ。3 人が心配になってやってきました。3 人は無事に通ったようだね」

鬼「お前だな、3 人になんか教えたのは」

オ「急になんだね。挨拶もできないしょうがないやつじゃな おまえさんは」

鬼「今日は珍しく麓の方からウサギが来た」

オ「それでどうしました」

鬼「食おうと思ったら、口の中でもごもご言って、影になって行っちゃったわ」

オ「それからどうしました」

鬼「次にサルが来た」

オ「それで、どうしました」

鬼「なんだかわからないことを言って、半分消えていってしまった」

オ「それからどうしました」

鬼「次に、狸が来た。丸々太っておいしそうだった。ぱくりと食おうとしたら、逆立ちなんかしやがって、面食らっていたら、行っちゃった」

オ「それでは 3 人は無事に通れたのだね」

鬼「何だって、やっぱりお前が何か教えたのだな」

オ「教えましたよ。ただ日天さん、月天さん

と教えただけです」

鬼「何だ、日天さん、月天さんって言うのは」

オ「おや、鬼さんはまだ日天さん、月天さん  
を知らないのかね」

鬼「知らねえな。何だそいつは」

オ「日天さん、月天さんという姿が消える  
んじゃよ」

鬼「何だって、姿が消えると、俺のようなか  
い体も消えるのか」

オ「消えますとも、消えますとも」

鬼「面白そうじゃな」

オ「面白そうじゃろう」

鬼「面白そうじゃ、ひとつやってみるか」

オ「やってごらん」

鬼「やってみっかな」

オ「やってごらん」(とリズムカルに繰り返す)

鬼「やってみよう、日天さん、月天さん……」  
(スライド笛を鳴らして、消える)

鬼「ワハハハハハ……面白い 面白い、  
これは面白い。わしのような体が消えち  
まった。面白い 面白い。

オ「面白いじゃろう」

鬼「面白い。ところでばあさんどうやったら  
元に戻れるのだ」(笑いながら言う)(間  
をおいて)

オ「お前のような悪い鬼はもう二度と出して  
やるものか」

鬼「出してくれよう。元に戻してくれようー。  
助けてくれー」

(徐々に声を小さくしていき、遠く去る。

顔を出して演じるときは、最後は口をあ  
けて声を出さずに助けてくれーと言う)  
(間)

オ「心を改めたら出してやることにしよう」

第3景『熊さんの家に向かう道』

オ「おやおや三人が変な格好で歩いています  
よ。先回りして待っていきましょう」

(と上手に入り、上手から登場する。下手か  
らウサギたちが登場する)

ウ「おばあさん、鬼はどうしました」

(小さな声から徐々に大きな声で、遠くから  
近付いてくる感じをだす)

オ「うさぎさんかな」

サ「おばあさん。鬼はどうしました」

(小さな声から徐々に大きな声で、遠くから  
近付いてくる感じをだす)

オ「おさるさんかな」

タ「おばあさんん、鬼はいませんか」

(小さな声から徐々に大きな声で、遠くから  
近付いてくる感じをだす)

オ「きぬたさんかな」

タ「きぬたさんて何ですか」

オ「たぬきさんがさかだちしているからさ、  
ごめんごめんそんなこと言っている場合  
じゃないね」

オ「安心しなさい。鬼はもうどこかへ行っ  
てしまいましたよ。おやおや、ウサギさん  
は震えながら 小さな声で日天さん、月  
天さんと言ったのでしょうか。おとぎ峠  
に星が出たと言ってごらん」

ウ「怖かったから、震えていったのか。おと  
ぎ峠に星が出た」(スライド笛の後で、元  
に戻る)

オ「猿さんはきっと日天さん、日天さん、と  
日天さんしか言わなかったのでしょうか。  
おとぎ峠に星が出たと言ってごらん」

サ「日天さん、日天さん、としか言わなかったのか、おとぎ峠に星が出た」（スライ  
ド笛の後、元に戻る）

作 永柴孝堂 絵 井上治美  
白眉学芸社 1983

オ「狸さんは、月天さん日天さんとさかさま  
に言ったのでしょうか。さあ、おとぎ峠に  
星が出たと言ってごらん」

タ「さかさまに言ったのか、頭の中がふらふ  
らしている。おとぎ峠に星が出た。やっ  
と戻れた」

オ「私も一緒に熊君のところへ行くことにし  
よう。元気に歌って出発しましょう」（と  
言い、会場の子どもたちを巻き込みなが  
ら森のくまさんを歌う）

（ララランランラン・・・ある日森の中  
熊さんに出会った、花咲く森の道 熊さ  
んに出会った。

（花咲く森の道、熊さんに出会ったと徐々  
にゆっくり歌い、終わりをイメージして、  
最後に終わりの札を立てる）

#### 参考文献

オニノツリハシ 紙芝居幼稚園紙芝居 2 1 巻  
昭和 1945 年 3 月 25 日発行全甲社紙芝居刊行会  
作 高橋 五山 絵 中川 ハルオ

研究ノート「高橋五山オニノツリハシについて」

= ペープサート「日天さん月天さん」との  
関係を中心として = 高橋 洋子

大阪国際児童文学振興財団研究紀要第 2 7 号  
2014 年 3 月

ペープサート人形画帳 第 2 集

「日天さん月天さん」掲載本